

特集：卒業

生物学類学位記授与式卒業生謝辞 のようなもの

福士 路花（筑波大学 生物学類 4年）

春うらかな今日この日、私達は生物学類を卒業します。そんな出だしから始めようかな、などと考えていた謝辞を、結局読むことはありませんでした。

「ジャーナル用に卒業に関する文章を送って下さい。授与式の日を読むはずだった謝辞でも構いませんよ。」と3月末に学類事務に言われたものの、謝辞を作り上げる前に卒業式が無くなったので原稿などありません。一体何を書いたらいいのかなあ………と考えて居るうちに、なんと締め切りを11ヶ月も過ぎてしまいました。何度か書こうと筆を執ったこともありませんでした。多分不貞腐れた気持ちがあったのだと思います。なぜならば、総代に選ばれて私が得たものは、卒業式で学長から直接証書を頂く名誉な役が手に入る“はずだった”というぬか喜びだけ…。それに比べて、今年から新しく設けられた茗溪ナントカ賞を貰った友人は金一封を獲得。謝恩会で華々しく表彰され、金封と共に満面の笑みを浮かべる彼を、指を咥えて見ていた私のビミョーな胸中を汲んで頂きたい。そして同情するならカネをくれ。

とはいえ彼の4年間の努力と功績はよくよく存じており、尊敬しているので、賞賛する気持ちに勿論嘘はありません。翔一、本当におめでとう。

そんなわけで筆をとっては匙を投げだす行為を繰り返して締め切りを1年近く破り、もういいや、と思い始めていた矢先、丸尾先生からいつでもいいからお待ちしていますよ、という温かすぎるお言葉を頂き、こうして文章を書くことに相成りました。丸尾先生、本当にありがとうございます。随分長いイントロになってしまいました。

さて、やっと謝辞らしい内容に入ろうと思います。タイトルは卒業生代表の謝辞であるかのようになっていますが、ここで読み上げる予定もありませんので、代表ではなく私個人の想いを綴らせて頂きました。

卒業式が無くなって何が一番悔しかったかと言えば、大声で感謝の思いを伝える機会を失ったことでした。

私が4年間で振り返ってまず思い出すのは、辛かったことです。変わっていると言われるかもしれませんが、私の中にはふわふわと楽しくて幸せだった出来事よりも、辛くしんどい思いをした出来事の方が印象強く刻まれています。それらの思い出は、今となっては笑い飛ばせるようなものもあれば、今でもまだ、思い出すと苦しくなるようなものもあります。でもどれもその当時は本当に辛かった。もう立ち直れない、前を向くことはできないかもしれないと思う事もありました。それでも、そんな思いをしたけれども、今も私はここにいる。それはひとえに支えてくれた人々の存在があったからです。家族、多くの友人、先輩方、後輩、そして教職員の方々、たくさんの方が支えてくれたから、私は4年間前を向き続け、無事大学を卒業することができました。どれだけ感謝の言葉を尽くしても尽くしきれません。残念ながら卒業式という公の場で、皆様に大声で感謝の言葉を伝える機会はずいぶん失われてしまいましたが、この紙面(PDF面?)をお借りして、改めて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。四年間、本当にありがとうございました。

人生は本当に何があるか分かりません。昨日まで隣で笑っていた人が突然いなくなったり、さっきまでの穏やかな時間が一挙に崩れ去ったりするのだという事を、震災を通じて改めて思い知らされました。だからこそ、いつ何があってもできるだけ後悔することのないように感謝の気持ちをきちんと伝えておこう、書き残しておこう、そう思いこの文書を書かせて頂きました。改めて、生物学類教職員の皆様にこのような機会を設けて頂いたことを心よりお礼申し上げたいと思います。

末筆ながら、私の大好きな生物学類、及び筑波大学の今後益々の発展と、皆様のご健康とご多幸、そして平穏な日々が末永く続くことをお祈り申し上げます。

Communicated by Takeo Hama, Received February 22, 2012.

